

# 花粉症。 アレルギー性鼻炎の 病診連携について

耳鼻咽喉科 松井 伸一郎

今年のスギ花粉飛散予想は例年の1.5倍だそうで、患者さんにはつらい季節の到来となりました。毎年様々なメディアで予防、薬物療法、代替医療などが報告され大多数の方が十分な知識を持っておられることと思われ、今回は花粉症の病診連携についてお話しいたします。まず群馬県内の耳鼻咽喉科の現状についてですが、群馬大学から常勤医を派遣している病院が20年前に比べると半減しております。特に西毛地区で減少が著しく、高崎総合医療センター(旧国立高崎病院)、藤岡総合病院、碓氷病院などが常勤医撤退となり、西毛地区や埼玉北部の救急対応や、手術や入院治療を必要とする患者さんが当院に集中してきております。さらに以前は3人いた当院の耳鼻科常勤医も2人に減員となつてしまいました。そのためじっくりと患者さんの訴えを聞いている時間はなく、待ち時間は長くなる傾向にあります。効率の良い医療を実践するため、周知のように現在は家庭医をもつていただき、まずその先生に相談し入院や手術、精密検査の必要があれば病院に紹介していただくという病診連携が提唱されております。花粉症についても予防や市販薬の効果が見られずに医療

機関での治療を希望する場合は、まず近くの耳鼻咽喉科医院を受診されては如何でしょうか。近医での診療の結果、通年性の鼻閉があつたり、副鼻腔炎や鼻茸(ポリープ)、鼻中隔彎曲症(鼻の中央の仕切りが曲がっている状態)が合併し薬物療法の効果が不十分であり、外科的治療(鼻茸の切除、副鼻腔炎に対する内視鏡手術、鼻中隔彎曲症の矯正術など)を希望される場合は紹介していただくのが良いと思います。今、この文章を書いているのは1月中旬ですが、病棟、外来ともインフルエンザや胃腸炎などが猛威をふるつており、花粉症の薬物治療目的のため外来で長時間待つことは決して得策ではないと思ひ提案させていただきました。

